

# 参加動機が観戦意図へ与える影響に関する研究 ーテニスを事例としてー

スポーツビジネス研究領域

5009A050-4 霜島 広樹

研究指導教員 木村 和彦 教授

## 【研究の背景】

わが国におけるスポーツ参加の状況に目を向けてみると、笹川スポーツ財団のスポーツライフデータ(2008)より、週2回以上定期的の実施されている球技系スポーツの中で、野球・サッカー・ゴルフ・硬式テニス・バドミントン・卓球などは、参加人口が、全種目の中でも上位20位以内に入っており、「するスポーツ」としてはメジャーな部類に含まれるスポーツであると言える。しかし、これらのスポーツの中で、テニス・バドミントン・卓球などは、そのスポーツに参加している人口は多いものの、「みるスポーツ」としては、観客動員数が1大会あたり2万人を超えるような大会が、極めて少ないという現状が挙げられる。具体的には、硬式テニスでは2009年度、観客動員数2万人以上を記録した大会が、楽天ジャパンオープン、東レ・パンパシフィックオープン、そしてニッケ全日本選手権の3大会だけであり、バドミントンにおいてはヨネックスジャパンオープンの1大会のみ、卓球では1大会も存在しなかった。

これら3競技に対し、日本におけるゴルフを例にとると、同様の大会が年間で28大会も存在している。このことから、テニス・バドミントン・卓球などの競技は「するスポーツ」としてはメジャーであるが、「観るスポーツ」としてはマイナーであるということが覗える。なぜテニス、バドミントン、卓球などのスポーツは「するスポーツ」としてはメジャーであるにも関わらず、「観るスポーツ」としてはマイナーなのか。この疑問を解決し、上記のようなスポーツにおける豊富な参加人口を、プロトーナメント等への観戦者へと繋げる方策を検討する事は、このようなスポーツを発展させていく為、重要なテーマの1つであると言える。

佐野(2007)より、テニスの観戦者は、その約75パーセントがテニスの経験者であり、「みるスポーツ」よりも「するスポーツ」への関心が、他のスポーツ観戦者に比べて高いといった事実が明らかにされている。また、テニスの試合観戦における満足度は80%と、他のスポーツイベントに比べても高く、このことが「リピーターが多く新規観戦者が少ない」といった現象に繋がっているといった事も、佐野(2007)によって指摘されている。

以上の事から、「スポーツを行っているものを、如何にし

てそのスポーツの観戦者へと導くか」という研究は、参加人口は多いが観戦人口が多くない競技にとって、重要なテーマであると考えられる。しかし、先行研究をレビューした結果、そのような研究は殆ど見られず、Tokuyama(2009)やMcDonaldら(2002)がスポーツ参加動機とスポーツ観戦動機の関係性について述べているものの、スポーツ参加動機とスポーツ観戦行動の因果関係や、具体的にスポーツ参加者をスポーツ観戦者へと導く方法についてまでは言及していない。よって、スポーツ参加とスポーツ観戦との関係をより明確にしていくことは、スポーツマネジメント研究の発展へ大きく貢献するものであると考えられる。

## 【研究の目的】

本研究の目的は、①スポーツ参加者における、スポーツ参加動機とスポーツ観戦経験・スポーツ観戦意図の関係性を明らかにすること、②スポーツ観戦意図を高め、スポーツ参加者をスポーツ観戦者へと導く方法についての提言を行うこと、である。

## 【研究の方法】

研究の方法に関しては以下のような流れで行った。

- ① スポーツ参加者の定義づけ
- ② スポーツ参加動機の抽出(先行研究から)
- ③ テニス参加動機の構成(ヒアリング調査から)
- ④ プロテニストーナメント観戦意図に影響を与えているテニス参加動機を特定するモデル(Model I)作成

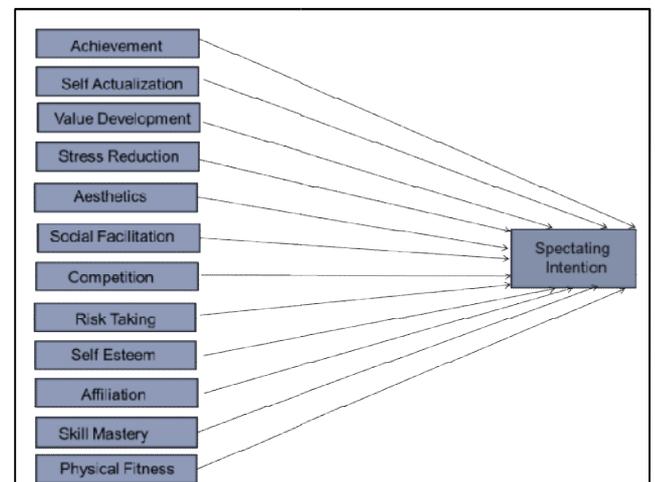


図1 Model I

- ⑤ トーナメント参加頻度が、参加動機・観戦意図に与え

る効果を分析するモデル(Model II)の作成

## ⑥ 質問紙調査によるモデルの分析

### 【結果と考察】

まず、プロトーナメント観戦に行ったテニス参加者と行かなかったテニス参加者とを比較した際、観戦に行った参加者は **Stress Reduction** と **Physical Fitness** を除く全てのテニス参加動機が大きいことが、統計的に示された。これより、観戦経験の有無とテニス参加動機には大きな関連性が存在している可能性が高いということが明らかになった。

また、Model I を、テニスクラブ、公共テニスコート、そしてテニスサークルにおけるテニス参加者のサンプルに当てはめて分析を行った結果、**Skill Mastery**、**Self Esteem**、**Achievement** などの参加動機が、観戦意図に対し高い影響力を持っていることが確認された。特に、**Skill Mastery** は 3 つの環境全てにおいて統計的有意性が確認された。つまり、技術的に向上したいと思うことによって、東レ・パンパシフィックオープンやジャパンオープンなどの観戦意図は高まるということが示唆された。

最後に、テニスクラブにおけるサンプルを使い、AMOS17.0 を用いた共分散構造分析にて Model II を分析した。出力された結果に対し、有意確率が 0.1 以上となったパスを全て削除した結果が、図 2 に示されている。

小塩(2008)の指摘によると、GFI、AGFI、CFI が 0.9 以上、かつ RMSEA が 0.05 以下であることが、良いモデルである条件とされている。Model II では、GFI、AGFI、CFI、RMSEA の全ての値が、小塩(2008)の指摘をクリアすることができ、このモデルの統計的妥当性が確認された。

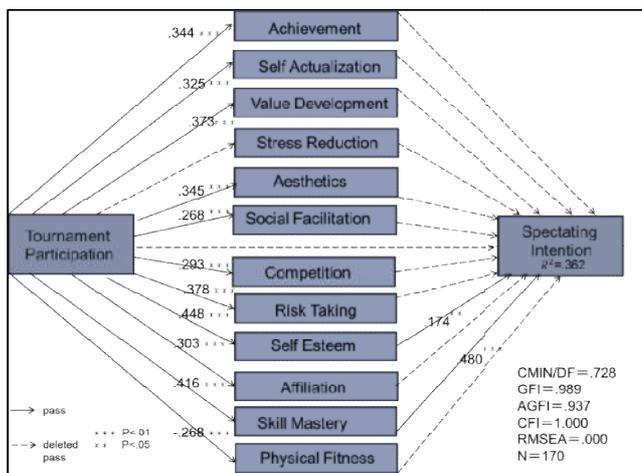


図 2 Model II (分析結果)

「トーナメント参加頻度が高まるほど、**Stress Reduction** と **Physical Fitness** を除く全てのテニス参加動機が高まり、またそれらのテニス参加動機 (**Self Esteem** と **Skill**

**Mastery**)が高まることで、プロテニストーナメント観戦意図が高まっていく」ということを図 2 は示している。この結果は、ヒアリング調査の結果からも見られた、「自分自身がトーナメントに参加し、ルールや戦術等を理解できるようになることが、プロトーナメント観戦に、より興味を抱くようになることへ繋がる」といった内容を裏付けるものでもあった。

以上のことから「テニス参加者をトーナメントや競技会に参加させることが、プロテニストーナメント観戦者を増やすための1つの方法である」という論を示すことが出来た。

### 【結論】

本研究で得られた知見は以下の3点である。

①観戦経験の有無が **Stress Reduction** と **Physical Fitness** に全く影響を与えていないことから、「スポーツをストレス発散や健康の為にやっているものは、それらを主なスポーツ参加動機としている限りは、スポーツ観戦者となる確率は低い」ということが示唆された。ヒアリング調査の結果からも覗えたように、テニスをやっている動機として「健康増進、暇つぶし」の部分のみが高いものは、スポーツジムなどに行って運動したりすることの代わりに、テニスを行っている可能性が高く、彼らをスポーツ観戦者とするためには、**Stress Reduction** と **Physical Fitness** 以外のスポーツ参加動機を、特に高める必要があると言える。

②スポーツ参加動機の中でスポーツ観戦意図に強い影響を与えている可能性が高いのは、**Skill Mastery**、**Self-Esteem**、**Achievement** などであった。特に **Skill Mastery** に関しては、3つのテニス環境全てで高い統計的有意性が示されており、**Skill Mastery** を向上させることによって、観戦意図を向上させることが可能であることが示唆された。よって、如何に「技術的に向上したい」という動機を、スポーツ参加者に強く持たせることが出来るかどうか、その競技のスポーツ観戦者を増やす為の鍵となりうると言えるだろう。

③スポーツ参加動機を高める1つの方法として、「スポーツ参加者のトーナメント(大会)出場頻度を高めれば良い」ということが明らかとなった。また、「スポーツ参加者のトーナメント出場頻度の向上が、スポーツ参加動機の向上に繋がっており、その結果スポーツ観戦意図の向上に繋がる」ということが、Model II の分析によって示唆された。スポーツ観戦者を増やす1つの方法として、「スポーツ参加者を如何にして、トーナメントや大会に出場させるか」といったことが重要であると言える。